

東京蜘蛛談話会 2016 年度採集観察会

1. 期 日： 第 1 回 2016 年 5 月 15 日 (日) 第 2 回 2016 年 7 月 10 日 (日)
第 3 回 2016 年 10 月 16 日 (日) 第 4 回 2017 年 2 月 19 日 (日)
2. 場 所： 東京都町田市 芹ヶ谷公園
3. 集 合： 集合 10:00
小田急線町田駅西口の正面 「特急券うりば」 前
芹が谷公園は町田駅から徒歩 10 分
(町田駅を北上し町田街道 47 号線を越える)
4. 世話人： 池田博明
携帯電話：090-9670-1525
5 月の予定：芹が谷公園西口から入り，管理事務所付近で昼休み。
その後，国際版画美術館方面へ東口まで。

東京蜘蛛談話会 2016 年度合宿

2016 年度の合宿は，北海道千歳市支笏湖温泉周辺にて実施します。

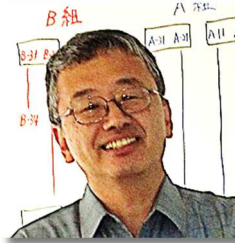
1. 日 時：2016 年 7 月 23 日 (土) ~25 日 (月)
2. 宿 舎：北海道千歳市支笏湖温泉 休暇村支笏湖
〒066-0281 北海道千歳市支笏湖温泉 TEL 0123-25-2201
(詳しいことは参加者にご案内します)
3. 集金額：参加者にご連絡いたします。
4. 日 程：参加者にご連絡いたします。
5. 申 込：先に行われた 4 月 24 日の総会時に**満員**となりました。
6. その他：参加希望の方は，別途，各自で予約の上，現地で合流が可能です。
7. 担 当：加藤輝代子
8. 連絡先：東京環境工科専門学校内 加藤輝代子
〒130-0022 東京都墨田区江東橋 3-3-7
加藤携帯電話 090-7012-6458
パソコンメール kiyoko_kato@tce.ac.jp

東京蜘蛛談話会例会総会

2016年4月24日 東京環境工科専門学校にて



(1) アシナガグモの網造りを観察しよう・ハエトリグモの系統分類: マディソン氏の提案 池田博明



(2) ホソテゴマグモ、アサカワゴマグモ、ヒメウスイロサラグモの同定は混乱している 安藤昭久



(3) 足場糸の切断実験

新海 明
代理 谷川明男



(4) タイ王国クモ見遊山の旅 2016

谷川明男



(5) 東京蜘蛛談話会と多足類懇談会

萩野康則



(6) クモの網の乗っ取り

浅間 茂



(7) クモの話題 3
つ：1) エゾコモリグ
モ；2) ハナナガラ
フカニグモ；3) ミズ
グモ 小野展嗣



(8) 沖縄クモ旅行
2016 憧れのケアシ
ハエトリを求めて

鈴木佑弥



(9) 電子顕微鏡でみ
たクモの微細構造(18)
—歩脚—

梅林 力



入退会は：

事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

KISHIDAIA 原稿投稿先：

谷川明男 〒横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp
池田博明 〒258-0018 足柄上郡大井町金手 1099
E-mail : fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp
キシダイアの原稿締め切りは、6 月末日と 12 月末日です。

通信原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp
通信の原稿締め切りは、4 月末の総会の日まで、8 月末、12 月末です。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 2000 円、学生 1000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：

会計担当 須黒達巳
〒240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂 1-39-6
TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

2015 年度決算

東京蜘蛛談話会

収入の部

2016 年 4 月 24 日

項 目	決算額(¥)	備 考
1.会費	285,000	欄外 1
内訳 a.15 年度会費	129,500	
b.16 年度以降前納会費	109,900	
c.14 年度以前未納分会費	45,600	
2.寄付	1200	
3.雑収入	0	会誌売上
4.別刷り代	0	
5.利息	772	
6.クモ基本 60 売上	315,180	
収入合計	602,152	
6.繰越金		
(1)13 年度以降前納会費	523,400	
内訳 a.14 年度分	413,200	
b.15 年度分	76,000	
c.16 年度分	26,600	
d.17 年度分	7,600	
(2)特別会計（プール金）	3,386,786	
繰越金合計	3,910,186	
合計	4,623,142	

支出の部

項 目	決算額(¥)	備 考
1.会誌作成	505,147	107,108 号
2.会誌発送	32,144	
3.別刷り作成・発送	0	
4.談話会通信	73,909	144,145,146 号
5.事務局等通信費	49,584	
6.事務用品等	0	
7.クモ基本 60	1,206,372	
8.予備費	0	
支出合計	1,867,156	
9.繰越金		
(1)14 年度以降の前納会費		
内訳 a.15 年度分	400,100	
b.16 年度分	290,700	
c.17 年度分	46,400	
d.18~24 年度分	28,600	
(2)特別会計（プール金）	2,438,572	
繰越金合計	2,838,672	
合計	4,705,828	

繰越金の預け先：郵便貯金（普通） ¥1,808,856
振替口座 ¥1,002,780
現金 ¥27,036
合計 ¥2,838,672

欄外 1：15 年度会費は、前納分 214,200 円とあわせて 343,700 円受領しました。

以上、報告いたします。2016 年 4 月 1 日 会計 須黒達巳

適切に会計処理されています。2016 年 4 月 22 日 会計監査 興石紗葉子

2016 年度予算

東京蜘蛛談話会
2016 年 4 月 24 日

収入の部

項 目	金 額(¥)	備 考
1. 16 年度会費	386,700	2,000 円*20 人+1,900 円*123 人
内訳 a.16 年度会費前納分	290,700	+1,000 円*17 人
b.16 年度納入予定分	96,000	2,000 円*39 人+1,000 円*18 人
2. クモ基本 60 売上	20,000	1,000 円*20 冊
2. 寄付	0	
3. 雑収入	0	
4. 別刷り代	50,000	
5. 利息	500	
収入合計	417,600	
6. 繰越金		
(1)15 年度以降の前納会費	109,400	
内訳 a.17 年度分	46,400	
b.18 年度分	34,400	
c.19~24 年度分	28,600	
(2)特別会計 (プール金)	2,438,572	
繰越金合計	2,547,972	
合計	3,005,172	

支出の部

項 目	金 額(¥)	備 考
1. 会誌作成	500,000	250,000 円×2 回 (109,110 号)
2. 会誌発送	35,000	
3. 別刷り作成・発送	50,000	
4. 談話会通信	90,000	30,000 円×3 回 (147,148,149)
5. 事務費・通信費	30,000	欄外 1
6. 事務用品等	15,000	
7. 総会・例会	20,000	10,000 円×2 回
8. クモ基本 60	53,600	改訂費 50000 円, 発送費 3600 円
9. 予備費	10,000	
支出合計	803,600	
10. 繰越金		
(1)17 年度以降の前納会費	109,400	
内訳 a.17 年度分	46,400	
b.18 年度分	34,400	
c.19~24 年度分	28,600	
(2)特別会計 (プール金)	2,092,172	
繰越金合計	2,201,572	
合計	3,005,172	

欄外 1: 事務局 5,000 円, 編集 5,000 円×2 人, 通信 6,500 円, 会計 5,000 円
通信費, 振込手数料等 3,500 円

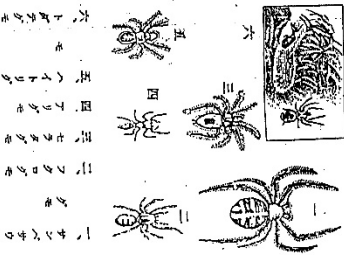
2014 年度会員動向

2015 年 4 月 1 日時点の会員数 203 名

入会 17 名, 退会 3 名

2016 年 4 月 1 日現在の会員数 217 名 (一般 182 名, 学生 35 名)

(蜘蛛)モク



一 おもにどこに住んで居るか

冬 夏

二 巣を造る様子及び次の事を

見よ

1. 糸の出る所

2. 脚の用ひ方

三 巣はクモにとつてなんのためになるか

四 餌は何か又取り方を見よ

五 クモを巢から落して見よ

六 クモについて次の事を見よ

1. 體は幾つに分れて居るか

2. 脚の数

七 蜘蛛類と昆蟲類とはどう違ふか

1. 蜘蛛類

2. 昆蟲類

八 蜘蛛の卵を捕つて養ひ其の發生及び生活の有様を見よ

大正十年四月七日印
大正十年四月十日發行
大正十四年三月五日訂正再版印刷
大正十四年三月五日訂正再版發行

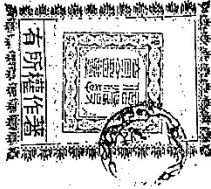
定	四年用金廿八錢
價	六年用金廿八錢

信濃教育會

上原才一郎

光風館書店

東京市神田區神保町六番地



京都だより（５）醍醐の随心院

新海 明

古塔めぐりを始めた頃、我が国最古の五重塔が醍醐寺にあることを知った。

若狭小浜の明通寺の塔に感動し、次に山口の瑠璃光寺を訪ね、三番目が醍醐寺だった。だが、日本最古の塔は期待に反した。五重塔を取り巻く景色が殺風景に過ぎるのだ。さらに、京都の寺院ではよくあることだが、塔頭や名勝ごとに拝観料を取られるのも興ざめだった。

少し気落ちしながら醍醐寺をあとにし、せっかくなので付近の寺院を訪ねることにした。道標に随心院小町寺と書いてあるのを見かけ、そこに向かった。観光客は一気に減り、境内は静寂に包まれていた。庭園には小野小町が使っていたという古井戸があった。その周囲の苔むしたむき出しの崖の様子が一目で気に入った。

「きっと、いるぞ」。井戸の際の崖に目を凝らす・・・と、戸蓋が目に入った。やはり「いた」。さすがに京都の景勝地なので、掘り取りをする勇気はなかった。谷川さんの技があれば可能かもしれない。ノグチゲラに匹敵するその技を、残念ながら私は有していない。ただ複数のキシノウエトタゲモの戸蓋を確認しただけであった。小野小町女史が、この庭を眺めて過ごした時代にもキシノウエトタゲモはここでひっそりと暮らしていたのだろうか…と書くと、「たかが千年前だから、いたに決まっているじゃないか」という声が聞こえそうだ。しかし、キシノウエトタゲモの分布はかなり攪乱されている可能性が高いことが最近になって分かってきているのだ（谷川・新海 2014, K105）。ごく近世に庭師によってもたらされたかも知れないのだ。

関東に住んでいる私は、キシノウエトタゲモは身近なごくありふれた存在だったので、日本のほかの地域でも同様に豊産するものと思っていた。しかしながら、クモタケの調査（畑守ら 1997, K72）や谷川さんと巡ったキシノウエトタゲモの分布調査の結果は、このような印象が思い込みにすぎないことを示していた。

本州・四国・九州でのキシノウエトタゲモの分布は、かなり偏ったものだった。東京や京都ではどこでも頻繁に観察できるクモだが、その他の大部分の地域では、ごく限られた場所に見られたのだ。東京や京都の分布の方が、全体から見れば特異なようである。

キムラグモを求めて九州の各地を谷川さんとともに回ったが、その際によく二人で話したことがある。「九州でキムラグモを採集したいという人の案内は簡単だが、キシノウエトタゲモを採りたいという人の案内は難しいね」というものだ。「九州でキシノウエトタゲモの採れる場所は」と問われたときに、ここに行けば確実に採集ができると紹介できる所は「ない」のである。「かつて、この辺りで採集したことがありますよ」という程度が限界である。

そのような分布が、キシノウエトタゲモの本来のものであるのかも知れない。

オニグモと風うさぎ (5)

加藤 康子

風船は微妙な高さを飛んでいた。光を反射する無数の波にふわりと近づいたり、岸辺の柳の枝をすれすれの角度で通り抜けたりした。風うさぎは自分の足の動きによって、体のあちこちが揺れたり伸びたり、ゆるやかにねじれるのが心地よく、風船と戯れていた。

そうやって 病院から少し下がっていくと、フェンスに囲まれた大きな庭園があらわれた。幾何学的な形や円型に区切られた花壇があり、昼間ならば、たくさんの人が行き交うことだろう。

小径に沿って植えられたバラやクレマチスは、シーズンも終わりに近く花はまばらになっていたが、替わりに トランペットのようないくつも枝から下げたダツラの木が両腕を大きく広げていた。ジギタリスや飛燕草のつんと伸びた花穂もとりどりに咲きそろう、足元には可憐な のこぎり草やメキシコひまわり、ポンポンダリアを従えている。

庭の中央は低い丘になっていた。ふさふさとした芝生に覆われ、その上に 人が二人向かい合ってなんとか坐れるほどの、六角形のかじんまりとした建物があった。てっぺんは風見の鶏が つやめく赤いトサカを空に向かって立てている。

月明かりの庭は、想像をめぐらせるのにふさわしいところだ。たしかに、くっきり鮮やかに花たちの顔が見えるわけではないが・・・淡い青の空気の層が織りなす光と影は、無言のほほえみのように静かに心を揺らす。

☆

「こうして見ていると 花はただ咲くだけでいいのね。花びらを広げて無心に咲いていれば、誰からも美しい！と賛美され、密の香りに誘われてやってくる虫たちが、花粉を体中につけて運んでくれる。花は地面にしばられてはいるけれど、先のことは潔く虫や風に託して、思い悩むこともなく、ほがらかに華やかに咲いて、気がついたときにはもうどこかに散って消えてしまう。その儂い姿に ますます愛着が深まるというわけね」

オニグモのつぶやきを聞いて、風うさぎは笑い声をあげた。しかし、薄明りのなかでは、どの花も楚々としてみえる。そこには何んの意図もたくらみも無さそうだ。

花を見ていると 風うさぎの心に思い浮かぶ光景がある。

それは、今夜と同じように大きな満月が出た夜のできごとだった。明け方に近い空に始まった 印象深いひととき・・・・・・

その夜、風うさぎは野原の草むらの中にいた。野うさぎの母親は 一日一回夜になってから子うさぎのもとにやってくるが、子供たちがそのふところに抱かれて乳を呑み、ホッとできるのはほんの束の間のことだった。母親はすぐにどこかへ行ってしまう。う

さぎを狙う敵の多い野原では、それが幼い子うさぎたちを守る一番良い方法だからだ。

風うさぎも兄弟たちと離れて、草の陰にかくれていたが、その好奇心の強い性格から、時々是我慢でせずに葉の上に顔を覗かせてしまう。風によって流れてくるみずみずしい若芽のにおいをかぎ、動き回る虫たちを眺め、なにか意味ありげに鳴く、よたかの声に耳を澄ましたりしていた。なかでも 遠くにちらちらと光る灯影を見つけると、そこに暮らす人間たちへの強い憧れに心がときめくのだった。

夜明け前の西の空には 月が静かに気高くそこにあったが、時が過ぎてゆくにつれて、うるうると白色を帯び、輪郭が薄くなっていった。東の空は赤く染まって、昇ってくる新しい朝の太陽を出迎えるにふさわしいエネルギーに満ちてくる。遠くの高山の頂がバラ色になると あたりの空気もやわらかにふくらんでくるようだ。

そして、太陽が山の稜線に達すると弾ける光が大気を満たしていった。一瞬のうちに太陽と月が入れ替わったのだろうか。地上に変化が起きたのはその境界のうちなのだろうか。

消えてゆく月は、ため息のようにかすかな光の線を引いた。それが太陽の光と混じり合うと、空からの視線となって、ひとすじ野原に注がれた。すると、受けとめた野原に夢のようなことが起きてきたのだ。

花々が 金色に輝く風を送り出しながら、いっせいに咲き始めた。一枚一枚と花片を広げ、なんともかわいらしい「ポッ」という音をさせて。

自然は何か楽しい遊びでも思いついたのかしら と、風うさぎは驚いた。まだ幼い野うさぎだった彼が、風の色を見ることができた初めての日だった。

☆

「あつまた何かが聞こえる」

庭園を出たばかりのところで オニグモの足先はまた甲高い声を捉えていた。さっき聞いた人間の赤ん坊の泣き声に似ているようでもあるが、ミュウミュウと二つの声が不規則に入り混じって響いてくる。

「あっ あそこだ」 風うさぎもすぐにオレンジ色の風をみつけ出した。

どうやら その声の主は 先のほうにある繁みの中にいるらしい。そこには朽ちた小屋の捨ておかれた材木があり、上をからすうりの蔓が這いまわって、こんもりとした緑の隠れ家ようになっていた。よく見ると、蔓をかきわけて二匹の子猫が伸びあがり、口をせいいっぱい開けて叫んでいる。

「おやおや、迷子の子猫かしら」

「ほら向こう岸にもオレンジ色が見えるよ。母猫が呼んでいるんだ」

「どうして川を隔てて母と子が別れているの？」

すると、風うさぎはすぐに答えを見つけた。

「あそこに堰があるよ。きっと昼間母猫は堰のコンクリートの壁を渡って出かけたんだよ。そして たまたま運悪く 田畑に水を引く為に人が水路を閉じたんだ。それで水が

いっぱいになってコンクリートの壁を越えてしまったというわけだ」

だとしても 上流に行けば橋があるのに、なぜか母猫は土手を下って堰に足をかけようと試みては諦めることを繰り返していた。

「子猫が鳴き叫ぶので 気持ちが動転してしまったのかも知れない。ここを離れることができなくなってしまったのかも」

「そうか、それじゃあ あの子たちを一匹ずつ母さんのいるところへ運んでやりましよう」

オニグモはこともなげに言った。

「えっ どうして？そんなことできないよ」

「小さな子猫一匹ぐらい この川ならひとつ跳びで運べるわ、大丈夫よ、あなたは風うさぎだもの」

「そういうことじゃなくて、ぼくは風うさぎなの、風の色を見るために飛んでいるだけなんだ、だからそれはできない、というか、やってはいけないって言われているんだよ。自然をいじったり、手出しをしてはいけないって。

あの子猫たちがきつねやフクロウにさらわれたとしても、それは運が悪かったと諦めるしかない。きつねやフクロウにも幼い子供がいて、その子のための食べ物を探しているとしたら、もしぼくが手出しをしたことで、その子が飢えて死ぬかもしれない。そんな風に考え出すと切りが無くなってしまうんだ。

だから父さんはぼくに言ったんだよ。勝手に誰かの運命にさわってはいけないよ、誰かの縄張りに入らず、争いごとの邪魔をするなって、これは言わば風うさぎのしきたりみたいなものなんだ ぼくだけの判断じゃ無い」

「ええっ？ それじゃあの子たちをそのままに放っておけてこと？ 向こう岸に運ぶだけで無事に母猫と一緒にになれるのに、知らんぷりして通り過ぎるってことなの、

それは、あんまりだわ……私たちがあの子猫に出会ったのは偶然のことだけど、私もいつかは母さんになるから解るの、何匹子供がいたとしても、どの子も同じように可愛いものよ、一匹だって失いたくないはず。助ける力があるのに無視して見捨てるなんてできないでしょう。きっと後悔するわ」

「そんなこと、よく解っているよ！ ぼくはうさぎだよ。いつも追いかけられる立場だよ。食われる方なんだ。子猫は野うさぎとは違う。小さいうちに母親から離れたらすぐに命を落としてしまうよ。ぼくだって決して平気なわけじゃない。いつだって迷う気持ちはあるよ。ぼくは意地悪じゃないんだ。こんなこと言いながらも後ろめたいよ」

風うさぎは顔を強張らせた。

オニグモは両方の牙をカチッとさせると、しおり糸を伸ばして風うさぎの目の前に下りてきた。

「あなたはとてもいいうさぎよ意地悪じゃない。それにあなたは人間が好きで尊敬もしているんでしょう？ 私は聞いたことがあるの、人間は、たとえ子猫一匹 壁の隙間に落ちたとしても、機械で壁に穴を開けてまでして助け出すって」

「ああそれは本当のことだよ。でもそれだけじゃなく人間は何でもできるんだ いろんな発見をして 何かを作り出し 新しく生まれ変わらせる力もある 自分たちだけでなく、ぼくたちのような野性の生きもの のことも考えてくれて危機から救い出してもくれる。この世界を誰よりも深く愛しているのは人間だとぼくは思う。

でもね、ぼくは人間じゃない。単に気弱な一羽のうさぎに過ぎない。風うさぎとして良い生き方がしたい願ってはいるんだけど、判断できないことばかりで迷うんだ。いつも思うよ、人間みたいに賢くなれたらなあって」

オニグモは実感していた。

「自分も小さくて無力な一匹の虫に過ぎない」

それでもやっぱり後には引けない。尻込みして逃げることはしたくない。小さな虫だからって考えることぐらいできる。

子猫たちはずっと鳴き続け 風うさぎは黙々と足を動かして、その上を旋回していた。

☆

「わかったわ それならこうしましょう！」

オニグモは一番前の二本の足をピンと跳ね上げて言った。

「私をあの子たちのそばに降ろしてちょうだい。とにかく二匹を静かにさせるわ。あなたは向こう岸に飛んで母猫に教えるだけでいいの 上流に橋があることをね。子供達は繁みに隠しておくから心配しないでねと伝えてね。それだけなら あなたの言うしきたりを破ることにはならないと思うの。

すぐに判断できないことは無理をしないでそのままそっと、あいまいなままにしておけばいいんじゃないかしら、ふさわしい答えはいつか出るものよ。今は力を合わせて 猫の母さんを安心させてあげて欲しいの」

風うさぎは少し戸惑いの表情を見せたが 体は無意識のように動き、急いでオニグモを降ろすと、向こう岸へと風船を進めた。

オニグモは足の力をゆるめると しおり糸の先にぶら下がった。

「もう少しで、あの口を糸でぐるぐる巻きにするところだったわ」

月明かりの土手の道を、母猫をつれて上流の橋に向かって飛ぶ風うさぎの姿が見える。オニグモは笑い出した。

「ヤッホー風うさぎ！ あなたは やっぱり とっても 良いうさぎだね」

